

課題研究 国際・文化学部 A 班

石川保夫、市川栄子、佐々木慶一、高橋悦子、中村香澄、宮倉正雄、
山下七重、渡辺輝美、渡部由美子

天王さま（祇園祭）

（有志による中間発表）

はじめに

石川 保夫

疫病を除けるために何百年も続けられてきた伝統行事である「天王さま（祇園祭）」が、あろうことか今年は COVID-19 によって壊滅されて、課題研究は腰砕けとなってしまいました。

祭り大好き人間の私がリーダーをまかされましたので、当初は、①課題の研究・見学と、②祭りばやしの練習と実演発表、を行うつもりでいました。そして研究テーマとして以下のことを提案しました。

1. 天王さまって誰？
2. 牛頭天王と祭りの関係
3. なぜ牛頭天王は消えた？
4. 竹寺のこと・神仏習合
5. 祭りの起源・経緯 ①松山の天王さま（八雲神社の山車・御輿）
②ささら獅子舞（下唐子、上唐子ほかの三匹獅子舞）
③神田祭の見学
④佐原の大祭の見学
（7月の八坂神社、10月の諏訪神社 山車祭り）
⑤その他
6. 「佐原ばやし」の練習

ちょうど COVID-19 が襲いかかりつつあった 3 月、ぎりぎりのタイミングで、ほぼ全員で飯能の竹寺を見学して、精進料理をいただくことができました。唯一の活動です。お祭りはすべて中止となって見学できず、課題研究も皆で集まって討議することもかなわず、発表は無理かとあきらめていましたが、「有志による中間発表」としてまとめることに致しました。

- | | |
|----------------|--------|
| （1）天王さまって誰？ | 佐々木 慶一 |
| （2）牛頭天王と祭り | 佐々木 慶一 |
| （3）なぜ牛頭天王は消えた？ | 石川 保夫 |
| （4）蘇民将来伝説と茅の輪 | 中村 香澄 |
| （5）竹寺訪問 | 山下 七重 |
| （6）竹寺の精進料理 | 市川 栄子 |
| （7）竹寺 | 佐々木 慶一 |

(1) 天王さまって誰？

佐々木 慶一

国際・文化学部の課題研究A班の「天王さま（祇園祭）」について、いろいろと調べていたら、インターネットの tenki.jp のライフという欄で、ホシナコウヤという漫画家ライターが、わたしが知りたかったことをズバリと見事に解説している素晴らしい文章を見つけました。ぜひともみなさんに読んでもらいたいと思い、その一部をここに掲載させていただきます。



7月7日より、二十四節季「小暑」となります。小暑・大暑の二暑は、暦の上では晩夏となり、夏の終わりにその熱気・火気がつのり、高温現象として現れることを示しています。豪雨や酷暑など、何かと不安定な小暑の時節ですが、この時期に始まる有名な行事があります。祇園祭です。日本三大祭りの一つでもあり京都最大の祭りでもある京都祇園会、福岡県の博多祇園山笠、福島県の会津田島祇園祭、この三を三大祇園と呼びますが、七月初旬～中旬をピークとして、全国で数かぎりないほど「祇園祭」が執り行われています。果たして「祇園祭」とは、そして祇園社＝八坂神社の主祭神として立ち現れる異形の神「牛頭天王」とはいったい何者なのでしょう。

「牛頭天王」と聞いて、「ああ、あの神様ね」とピンとくる人は、今の日本人にはほとんどいないでしょう。しかし慶応4年(1868)の「神仏判然令(神仏分離令)」「古来以来某権現或ハ牛頭天王之類其外仏語ヲ以神号ニ相称候神社不少候何レモ其神社之由緒委細ニ書付早々可申出候事。」と、「権現」と「牛頭天王」の神号を用いる寺社は、その名前を改めろ、と厳しく布告していて、名指しで禁令を出されています。

つまりそれは、諸権現(清瀧権現、飯縄権現、金比羅権現、東照権現、春日権現、熊野権現など)と単体神号で並列に扱われるほど、江戸時代以前の日本では「牛頭天王」は広くあまねく信仰される、人気の神仏だった、ということです。そしてこの「牛頭天王」が、祇園祭を執り行う八坂神社、かつ

ての祇園社「(876年(貞観18)、藤原元経が自宅を壊して牛頭天王のために精舎を造営寄付し、祇園精舎に因んで称したもの)京都の八坂神社の旧称(祇園の社(やしろ)」の祭神でした。

「祇園」とは、天竺(てんじく)五精舎「仏教の黎明(れいめい)期、古代インドに建造された5つの寺院」の一つで、祇樹給孤独園精舎、いわゆる祇園精舎のことです。「平家物語」の冒頭、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」、で知られるとおり、海のかなたの仏教の聖地として、古くから日本人の憧れと幻想をかきたててきた名でした。この祇園精舎を守護するのが、牛頭天王。このように聞くと、国際色豊かな外国由来の神様なのかと思いきや、日本以外の地域の信仰との関連が判然としない、出自不明、正体不明の神なのです。

牛頭天王の名は、「法華経」「華嚴経」などいくつかの経文に記される「牛頭梅檀(ごずせんだん) / ゴーシールシャ・チンダナ」からとられたものと考えられています。牛頭梅檀とは、南インドのヒマラヤ山脈(?)の牛頭と呼ばれる山に生える香木から精製した香料のことです。「伊呂波字類抄(橘忠兼1145年ごろ)」では、武塔天神が牛頭天王の別名として記載されます。けれどもこの武塔神というのもよく分からない神、神話として登場するのが備後風土記の「蘇民将来(疫病除けの神の名)(茅の輪を腰に着けて疫病を免れた説話を伝える)」の逸話です。

北方の海に住んでいた武塔神は、妻候補を探して南へと旅をします。その途上、一夜の宿を借りようと、土地の長者巨担将来(こたんしょうらい)を訪ねますが断られます。そこで巨担の兄で貧しい蘇民を訪ねると、質素ながらも暖かく武塔神を迎え入れます。後日、妻を娶り八人の王子を儲けた武塔神は一宿一飯の礼にと、蘇民将来を訪ね、「茅の輪を以て、腰の上に着けしめよ。吾は速須佐雄(ハヤスサノヲ)の神なり。」と自らの正体をあかし、さらに、「後の世に疫気(えやみ)あらば、汝、蘇民将来の子孫(うみのこ)と云ひて、茅の輪を以て腰に着けたる人はまぬかれなむ。」と語ります。さらに、自分を冷遇した蘇民の弟、巨担については、一族郎党疫病にして殺してやった、とも語ります。武塔神がスサノヲならば、牛頭天王もまたスサノヲということになり、また武塔神=スサノヲ神=牛頭天王は、疫病を思いのまま起こし、また疫病から守ってもらえる、崇りと恩寵(おんちょう)、両面性のある神ということになります。こうして、疫病除けの祭礼としてはじまった祇園祭では、「蘇民将来」の守護神を祀り、祇園祭に先立つ6月30日には、茅の輪を作り、くぐることで厄除けをする風習も結びつく縁起が誕生したわけです。

・869(貞観11)年にはじまった京都の祇園祭は、今年で1150年の節目となります。豪華壮麗な装飾で重量12トンにもなる巨大な山鉾(鉾・曳山)、仮装や踊りが華やかな花傘に注目が集まりがちですが、祭りの中心は八坂神

社から担ぎ出される三体の神輿と、その神輿を先導する綾戸井國中神社の久世駒形稚児が騎乗する騎馬です。神輿は、スサノヲノミコト（素戔嗚尊＝牛頭天王）が乗る中御座、その後であるクシナダヒメノミコト（櫛稲田姫命＝頗梨采女／はりさいじょ）が乗る東御座、二神の御子座であるヤハシラノミコガミ（八柱御子神・八王子）が西御座に乗り、いわば家族のお出ましとなります。

全国に 2000 以上の分社のある八坂神社。同系列（スサノヲ神を主祭神とする神社）には、出雲系の八雲神社、八剣神社、八重垣神社、熊野神社、分化して発展した東海地方、愛知県を中心とした津島神社（津島牛頭天王社）、関東の埼玉県を中心とした氷川神社、津島神社と同様に江戸時代以前には牛頭天王社と称していた巢鴨神社などがあり、その多くが祇園祭もしくは天王祭を執り行っています。そればかりか、同じ出雲系のタケミナカタノミコトを祀る諏訪神社や、菅原道真を祀る天神社も祇園祭を行うところは多いです。そこまではまだしも、さらに異色なのが何と真言宗の寺院で不動明王を祀る成田山新勝寺の祇園祭りです。その歴史は 400 年にも迫る歴史のあるものです。実は牛頭天王は医療の守護仏である薬師如来信仰とも習合され、牛頭天王の本地仏は薬師如来ともされているのですが、薬師如来は様々な薬草に知悉することを必須とされた山伏、つまり修験道者の信仰ともつながり、修験道の出羽三山、その奥の院の湯殿山は牛頭天王も祀っていたのです。

情報はしばしば、意図をもって（さらには悪意をもって）捏造される。その一例が牛頭天王（こずてんのう）と呼ばれる祇園の神様にみられる。

牛頭天王—牛の頭を持ったデーモン（悪魔。鬼神。）—だから悪疫の神—悪疫を撒き散らす神—しかし、信仰すれば悪疫から守ってくれる神—京都丸山の八坂神社に祀られる神、祇園祭はこの神の祭礼（神を祭る儀式・神社の祭り。祭典。）である。

ひとたび、病気にかかったら、まじないをするか、お祈りするしか方法がなかった時代、病気平癒を願って、この神に対する信仰は、燃え広がる野火のように全国に広まった。延喜式に名を連ねる由緒正しい古来からの名神社までが、本来の神を横において、この神を祀るようになった。

その時、この神様は、日本古代史の中のスサノヲノミコトと本体であるとされ、また、仏教の薬師如来の別の姿とされ、従来から我が国にあった神道とも習合して擦り寄り、勢力を拡張したのであった。

江戸時代、国学者たちは、この状況に憤慨していた。そもそも「てんのう」と云うと、庶民たちは、「天皇」ではなく「(牛頭) 天王」のことだと思いが気に入らない。その上、古事記・日本書紀の中で重要な働きをしているスサノヲノミコトをその化身だなどと称して、乗っ取っているのが怪しからぬ。牛頭天王はまことに疎ましく目障りな許し難いものであった。

そこで、彼らは一つの捏造をした。今西玄章は撰津国の豊島郡誌を書くに

において、「天正年間、織田信長、高山右近に命じて、しきりに社寺を剥落し焼亡するに及び、信長の信仰深い牛頭天王を祀るものと称して愁訴（しゅうそ）し、その難を逃れた。」と（注1）書いた。

次いで、秋里籠島も「摂津名所図絵」をこれに従って記述した。そして北摂の古社寺の多くが、自らの縁記書をこれに従って改変した。

つまり、牛頭天王を祀っているのは、信長の難を逃れるための一時的かつ臨時的な緊急避難であり、本来のものではないと云うストーリーを創作したのである。そして、遂にこれは、現在にまで及ぶことになる。

これは凄まじい捏造である。信長は延暦寺こそ焼き討ちにしたが、さほど、他の社寺に火を掛けてはいない。また、信長が牛頭天王を信仰したと云うのも嘘である。

歴史は捏造される。情報は捏造される。「歴史は勝者によって書き換えられる」と云う言葉があるが、しかし、勝者ばかりではない。誰でもが恣意的に（ほしいままに）書き換えるのである。（注2）

所詮、情報とは、かくまでも頼りないものなのだと思わなければならないのか。

（注1）「摂津名所図絵」の「為邦都彦比古神社」の条、および、彦比古神社の現在の略誌による。

（注2）明治初年、国学者たちの思いはすでに達観された。

明治新政府は神仏分離政策において、牛頭天王を祀ることを禁じた。牛頭天王を祀っていた神社は、祭神をスサノヲノミコトと改称するか、もしくは、牛頭天王を祭神の中から削除した。

（2）牛頭天王と祭り

佐々木 慶一

集団儀礼の一つ。日常から切り離された特別な時空に人々が集い、各種の儀礼行為を経験することによって、潜在的に持つ理念を実感として共有する行為。神話的な世界の中で神と人が融和するための宗教的な祭りが原始的かつ一般的。

盆などに死霊をまつるのは魂祭という。時期的に予祝と農耕開始の春祭、徐疫の夏祭、収穫の秋祭、鎮魂の冬祭など。祭礼は神魂の降臨で開始される。夜間の降臨が多い（宵宮（よみや）、暗闇祭）。神霊を招くには幟（のぼり）、鉦（ほこ）、柱などを飾り、神霊の送迎のため神輿（みこし）、山車（だし）などの神幸行列が行われる。玉取祭、綱引きなどの競技、火祭、神楽（かぐら）などの芸能、虫送神事、御田植祭などの農耕儀礼、卜占（ぼくせん）などの行事や、甘酒祭、芋煮神事といった神人供食も祭りの重要な要素である。祭りの主宰者は神主出現前は頭屋（とうや）などの集団の長で、古くは女性であった。神社の祭紀圏を構成する人々が地域的に限定されることを氏子という。

参考文献

インターネット tenki.jp ライフのホシナコウヤ著「祇園祭の祭神『牛頭天王（ごずてんのう）』

日本古典文学系「風土記」（秋元吉郎・校注 岩波書店）

祇園牛頭天皇御縁起

牛頭天王之祭文

全国の祇園祭・天王祭

八坂神社

成田山祇園会

フリー百科事典『ウィキペディア（wikipedia）』

広辞苑、竹寺の小冊子

（3）なぜ牛頭天王は消えた？

石川 保夫

牛頭天王は、7歳にして身長が225cm、90cm 牛の頭に、90cmの赤い角を持ち、赤色の肌をした異形の王であったため、恐ろしさのため近寄る者はなく、酒びたりの日々を送っていたという。疫病を広める行役神でありました。

医療が発達するまで人々は、4～5年ごとに襲ってくる疫病は牛頭天王の仕業と考え、この疫病神をなんとか鎮めようと必死になりました、市街地では花笠、山鉾、御輿を繰り出し、田園地帯では獅子舞を演じて、この悪魔を鎮め、退散を願ったのでした。京都祇園祭が元祖ともいえますが、中世の、とりわけ江戸時代には牛頭天王の信仰と祭りは全国に爆発的に広まってきました。

COVID-19が蔓延し、手の施しようがない昨今、当時の人たちの気持ちが実感としてわかります。

神仏習合の時代、牛頭天王は寺や神社に本尊または主祭神としてまつられ、どうか静かにして下さいと崇められていましたが、いつしか除疫、防疫の神として、二面性を持つようになりました。

飯能市の竹寺は、東日本唯一の神仏習合の生き残った寺として知られていますが、本尊の牛頭天王は、疫病をまき散らさないように普段は扉を閉めたまま閉じ込めて、本堂に鎮座しているそうです。12年ごとの丑年のみ、7男1女の八王子と一緒にご開帳ということです。

東松山市の神戸神社には、県道に面した鳥居に「牛頭天王宮」という立派な額が今も残っています。これは、東松山市の指定文化財の価値があると思います。

さて、これほど全国的に広まっていた牛頭天王信仰が、明治の初めに突如名指しで抹殺されたその経緯について、その背景を知るために、圭室文雄著の「神仏分離」（1977）は参考になります。



江戸の中期に「国学」が盛んとなり、国粹主義的な復古神道の流れは尊皇攘夷につながっていきます。古事記こそが日本の歴史であり、そこに登場しない外国の神＝牛頭天王は帰れと、今ハヤリの「反日」的な発想です。牛頭天王を徹底的に抹消して、そのかわりにスサノヲノミコトにすべて置き換えたのです。

明治新政府は、極めて政治的に、天皇を神格化して生き神様の元首にまつりあげました。国家を統治するために、牛頭天王が邪魔者だったのです。天皇の祖先の天照大神をいただく日本こそが、万国に照臨し、中国・朝鮮・東南アジア等を統御すべきという「八紘一宇」の日本中心主義がエスカレートしていきました。

大東亜戦争への流れは、牛頭天王の抹殺に端を発したのではないだろうか。牛頭天王が生き残っていたら、日本の歴史は変わっていたのではないだろうか。

牛頭天王に正面から取り組んだ書籍は、私の知る限り以下の4冊のみで、ひとことで言うと牛頭天王のことは「わからないことだらけ」。

真弓常忠編「祇園信仰辞典」(2002)

川村湊「牛頭天王と蘇民将来伝説—消された異神たち—」(2007)

長井裕「牛頭天王と蘇民将来伝説の真相」(2011)

鈴木耕太郎「牛頭天王信仰の中世」(2019)

(4) 蘇民将来伝説と茅の輪

中村 香澄

『蘇民将来』とは、日本各地に伝わる「説話」及びそれを起源とする民間信仰である。今日でも「蘇民将来」と記した護符は、日本各地の国津神系の

神(主にスサノオノミコト)を祀る神社で授与されており、災厄を祓い、疫病を除いて福を招くとして信仰される。

また、除災のため住居の門口に、「蘇民将来子孫家門」と書いた札を貼っている家も少なくない。

「説話」には、①スサノオノミコトか ②牛頭天王 が現れる、2パターンがあるが、ここでは、鎌倉時代中期の官人・ト部兼方の「釈日本紀」に引用された「備後国風土記」疫隈国社(えのくまのくにつやしろ)による説話を表記する。

【説話】

旅の途中で宿を乞うた武塔神は裕福な弟の巨旦将来から無慈悲な断られ方をしたが、貧しい兄の蘇民将来は、粗末ながらも丁寧にもてなした。後に再訪した武塔神は、蘇民の一族と親切な巨旦の娘に茅の輪を付けさせ、身の守りとさせて、茅の輪をわたされなかった巨旦の一族を皆殺しにして滅ぼした。

武塔神は、自らを「素戔嗚尊」であると正体を名乗り、これ以後、茅の輪を付けていれば、疫病を避けることができると教えた・・・とされる

*牛頭天王とスサノオノミコトは多くの民話伝承では、同じ人物であると言われている。

なお、武塔神が蘇民将来らに付させたとされる「茅の輪」は、現在でも厄除けのための儀式(茅の輪くぐり)として、素戔嗚系の神社で、『夏越の大祓(6/30)』と『(大晦日の)大祓(12/31)』に行われている。



(5) 竹寺訪問

山下 七重

課題研究のテーマは「牛頭天王」。

それは私が初めて耳にする言葉でした。

私たちチームメンバーはまだ早春の寒さ残る飯能の南、深山幽谷を思わせる牛頭天王おわします竹寺を訪れました。

山あいの自然に溶け込むその閑静な佇まいに、猛々しいイメージの牛頭天王がゆったりと休まれているようで思わず心が和みました。

話によりますと、牛頭天王はインドから長い歳月の旅路の果てに日本に辿り着かれ、この国における神仏習合の神となられ、民間信仰の中で常に華々しく生き続けて来られました。しかし明治の神仏分離の嵐の中で破壊され否定され省みられなくなってしまいました。その中を巧みに難を逃れ乗り越えられた寺社により辛うじて今日まで守られて来られました。

不本意にも表舞台から身を引かれ、人の記憶からも忘れ去られ、それでもそのお姿を変えながらも久しく民衆の傍らにおわしその安寧を願い続けてくださったという事に深い畏敬の念を抱かずにはられませんでした。

そんな中、私たちは暫し境内を参拝、散策の後、竹寺特有の趣のある竹の器での精進料理とご住職の御講話に耳を傾けるなど束の間、至福の時を過ごしました。そして、それぞれが心を残しながらも庭を彩る梅の香に送られ寺を後にしました。

こうして竹寺を訪れましたことは牛頭天王への興味を益々尽きないものとしてくれましたが、生憎にもコロナ禍の現在、その学問の入口に立ったに過ぎない私たちですが、その研究は残念ながら次の機会に委ねざるを得ませんでした。

その存在すら知らなかった「牛頭天王」をお教えくださったリーダーさんをはじめチームの方々に感謝しつつ、ありがとうございました。

(6) 竹寺の精進料理

市川 栄子

精進料理は、日本古来より民間薬膳として親しまれてまいりました。

この竹寺の自然が楽しめる「精進料理の会」を、春（三月～六月）と秋（九月～十二月）に催しております。

住職の法話に耳を傾けながら季節の素材を竹の器でお楽しみいただきます。（予約制）

秋の献立例

モミジ カキ サクラ ヤマミツバ

ヨモギ タンポポ

- ・フキノトウのつくだ煮 お供物 ワラビ
- ・栗の実（秋丁字の花）
- ・松の実（松）

- ・干しガキの天ぷら（カマズミ）
- ・梅のシソ葉巻き（野アザミ）
- ・アケビ（ヤマウドの花）
- ・イチヂクの実（ヤマハッカの花）



（7）竹寺

佐々木 慶一

「(天台宗・医王山・薬寿院・八王子・武蔵野観音三十三番結願寺・武蔵野俳句寺) (神仏習合之遺構)」

当山は、縁起によれば、「天安元年丑年、慈覚大師東国巡修の折、疫病流行し患者の多きを憐れみて、当山を道場として大護摩の秘法を修し、一切の障難を除き、疫病を降伏し疾患を除かししめん事を誓い、一刀三礼して尊像を造り、世の人を救い後世に遺し給へり……」と。

以来東国霊場として、山岳信仰の道場として千年の歴史を有しております。

本尊「牛頭天王」を祀り、本地仏に「薬師如来」を配し、神仏習合の姿を今に残す東日本唯一の遺構であり、「天王さま」と呼ばれ親しまれています。

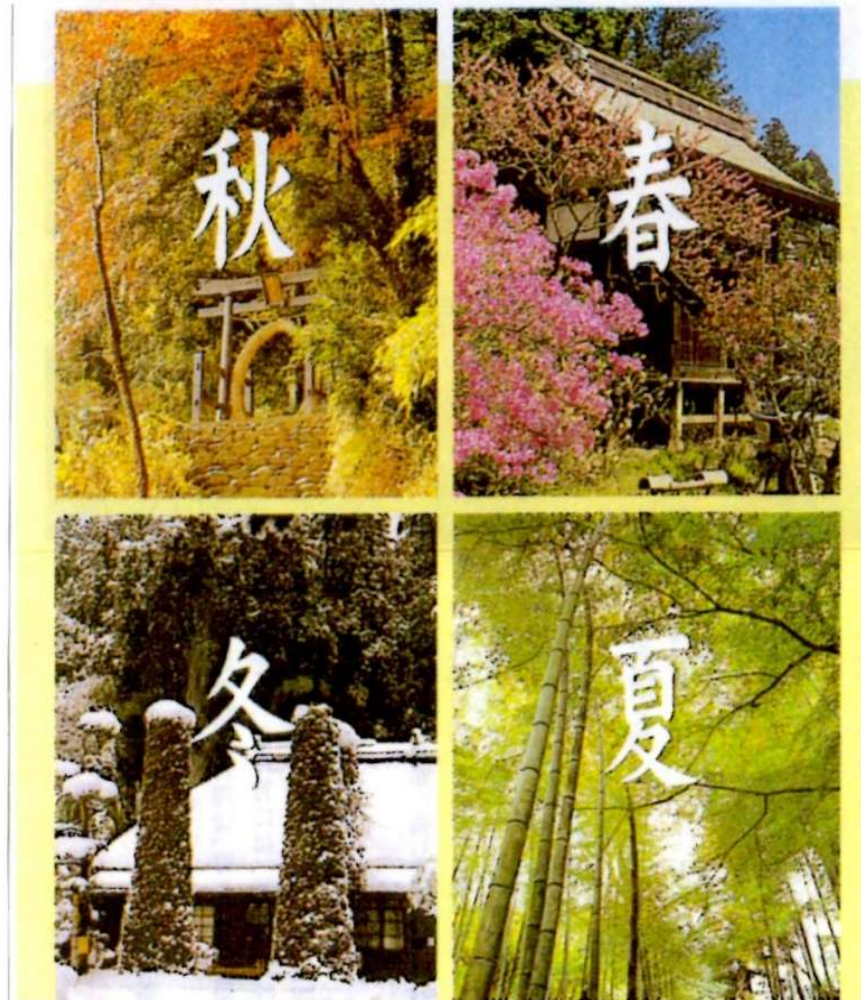
また、境内の観音堂には、聖観世音が祀られており、武蔵野観音の三十三番結願寺ともなっています。

本尊牛頭天王

牛頭天王は、インド祇園精舎の守護神ともいわれ、中国に入り、密教、道教、陰陽思想の習合があり、日本に伝わったとされています。さらに陰陽道の関わりを深め、また、蘇民将来伝説とも結びつき、スサノオと同体とされています。当山では疫難消除、除災招福、出世開運の「天王さま」として信仰されています。

本殿には、右手に斧、左手に索を持つ気を持つ木造牛頭天王座像とその脇きは八王子（牛頭天王の八人の童子）が祀られており、十二年に一度の丑年に開扉されます。尚、本殿牛頭天王本宮は、平成11年焼失しましたが、平

成15年再建されました。牛頭天王祭は、7月15日に仏式にて厳修されます。平成4年、中国人民有志により「牛頭天王」ブロンズ像が寄贈されました。





竹寺

神佛習合之遺構



- 西武池袋線「飯能駅」、JR「東飯能駅」から竹寺境内駐車場までタクシーで30分
- 「飯能駅」北口から国際興業バス中沢行終点下車(40分)、終点から徒歩40分(マイクロバス可)
- 「飯能駅」北口から国際興業バス名栗行小殿下車、徒歩50分(自然歩道)
- 圏央道「狭山・日高インター」より飯能市内経由55分(マイクロバス可)
- 竹寺から子ノ権現へ徒歩70分(豆口峠経由)子ノ権現から吾野駅、西吾野駅へ徒歩90分



天台宗

医王山 薬寿院 八王寺
武蔵野観音三十三番結願寺
奥武蔵俳句寺

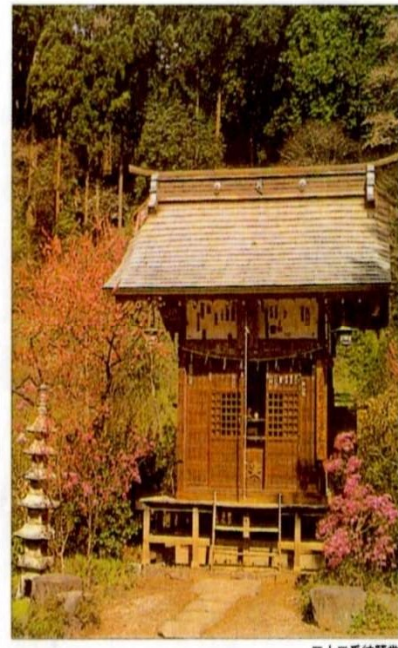
神佛習合之遺構

竹寺 TAKEDERA

〒357-0214 埼玉県飯能市南704 TEL.(042) 977-0108 FAX.(042) 977-2355
ホームページ <http://www.takedera.com>

武蔵野観音三十三番結願所

西武鉄道沿線、石神井公園駅付近からはじまり奥武蔵の山へと続く「武蔵野観音霊場」の三十三番結願所。また、一路観音、三十番の観音神も建立されています。



三十三番結願堂

奥武蔵俳句寺

文人墨客の登山も多く「奥武蔵俳句寺」として俳人等の絵馬、句碑等が数多く残されています



松原地蔵句碑



西本一都句碑

句碑
竹寺の竹の時雨に会ひ申す
今年竹溪流ひゞきやすきかな
琅玕の竹玲瓏と冬に入る
たもとほる竹の鳥居や竹の秋
竹寺は華師の浄土風光る

松原地蔵尊
秋元不死男
西本一都
鈴木白紙
中谷孝雄

蘇民将来と茅の輪

本殿登り口鳥居に、古伝「茅の輪」が設けられており、これをくぐり、心身の清浄を願います。そして当山では、木製六角の除災招福・出世開運の「蘇民将来」護符(お守り)を授与しております。
これは朱と墨で「蘇民将来子孫長久門戸祈攸」と書かれています。



蘇民将来



あけび

テйкаズラ

▲カタクリ(左)とシロハチエンレイソウ(右)

護摩祈願

身体安全 旅行安全等 牛体守護 開運厄除

行事

- 初詣祈願
- 雨竹会(五月五日)
- 牛頭天王大祭(七月十五日)
- 写経会(四月・十月の第二日曜日)
- 除夜の鐘

寺宝

- 鉄道大日如来坐像 室町時代末期
 - 十二面観音懸仏 永禄十年銘(一五六七年)
 - 線刻勝軍地藏懸仏 慶長十六年銘(一六二二年)
- 植物
高野槇 樹齢四百年(市指定天然記念物)



- 栗ごはん
- イワタケ
- 竹笹羊羹

- ムカゴ

- はちく
- 淡竹(ミヤマタニソウ)
- 白あえ(サンショウの実)

- ヨメナ(コトジ草)
- 花梨の甘露煮(ツクパネ)

- 竹寺の名月
- ツクパネの実

()内は添え花